

私の留学体験記

3年1組38番 上田あんな

Keyword: 「留学」「体験記」「カナダ」「バンクーバー」「ホームステイ」

1.はじめに

私は高校二年から三年にかけての半年間カナダに留学した。この留学は、学びや気づき、喜びや苦勞といったあらゆる経験を通して、私を大きく成長させた貴重な機会である。この経験がなければ出会うことのなかった人々とのつながりは、私にとってかけがえのない財産となった。

2.序論

私がカナダのバンクーバーに留学したいと思ったきっかけは、小学五年生(当時11歳)の夏休みに、姉と2人で母の友人が住むバンクーバーの家に約1ヶ月間滞在した経験である。その1ヶ月は英語を本格的に学ぶというよりも、海外の暮らしや文化に触れ、日本とは異なる環境で過ごすことを目的とした“旅行感覚”の滞在だった。当時の私はほとんど英語を話すことができず、身振り手振りや知っているわずかな単語を使ってなんとかコミュニケーションを取っていた。しかしその経験を通して、カナダという国やそこで暮らす人々の温かさに強く惹かれ、いつか外国の人と英語でしっかりとコミュニケーションを取りたいと思うようになった。この思いがきっかけとなり、高校での留学を決意した。

3.本論

そして、ついに1人で6年ぶりにバンクーバーを再訪した。バンクーバー国際空港に到着した瞬間、懐かしい匂いや風景に胸が高鳴った。到着したのは1月の終わり、真冬の時期で外は凍えるような寒さだったが、パーカー1枚でも寒さをほとんど感じないほど気持ちは高ぶっていた。30kgのキャリーケースを2つ引きながら空港を歩き、ついにホストファミリーと対面した。私のホームステイ先はホストマザー1人と、もう1人の留学生であるルームメイトとの3人暮らしだった。ルームメイトは半年前にカナダに留学生としてスイスから来た同い年の女の子だった。バンクーバーから車で約30分の場所にあるスティーブストンという小さな港町で約半年間の留学生活を送った。到着したばかりの頃は、英語での会話や生活習慣の違いに戸惑うことが多々あった。初日に特に印象に残っているのは、ルームメイトとその友人とショッピングモールへ行った時の出来事である。スターバックスでカナダに来て初めて注文をする際、緊張と戸惑いでうまく言葉が出ず、慌ててルームメイトに「一緒に来てほしい」とお願いしたことを今でもよく覚えている。

現地の高校は、日本の学校とは異なる点が多く、科目の取り方や時間割、授業時間、校則などすべてが新鮮だった。授業は朝8時30分に始まり、15時に終わる。週に2回は9時30分に始まる日もあり、1人4科目を半年間(1セメスター)通して学ぶ形式であった。授業は1コマ90分で、午前中に3コマ、昼食をはさんで午後1コマというスケジュールであった。私が履修していた科目は、ファッション、ELL(英語)、ELLサイエンス、アートの4つである。もちろんすべて英語での授業であったため、最初の2か月ほどは先生の言っていることも、今自分が何をすべきかも理解できないまま時間が過ぎていった。特に、ファッションの授業は留学生がほとんどおらず、すでに現地の生徒たちの輪ができていたため、最初は孤独を感じることも多かった。授業中、私が先生に質

問すると、私の拙い英語を理解しようと努め、できるだけ分かりやすい言葉や動作で説明してくれた。その優しさに何度も助けられたことを覚えている。

私が留学中に最も印象に残っているのは、ルームメイトを通して出会った友人グループとの時間である。そのグループは10人ほどで構成されており、ドイツ・イタリア・スイス・ブラジルなど、さまざまな国から来たインターナショナルの留学生が集まっていた。そのうちの3人は同じ学校に通っており、昼休みには一緒にランチを食べるなど、次第に交流が深まっていった。そのグループは放課後には近くのレストランで食事をしたり、映画を見に行ったり、休日には観光地を巡ったりと、共に過ごす時間が増えていった。そうした中で、文化の違いに驚かされることも多かった。例えば、集合時間に正確に来る人はほとんどおらず、多くのメンバーが10分から20分遅れて到着するのが当たり前だった。それに対して誰も注意することもなく、遅刻を気にしない雰囲気当たり前のよう存在していた。日本で育った私にとっては新鮮であり、同時に文化の違いを強く感じた瞬間でもあった。

最初の二、三ヶ月は、お互いに気を遣いながら会話をすることも多く、特に英語力の差を痛感する場面があった。グループの中で唯一英語が母語でない私は、会話のスピードについていけなかったり、ゲームのルールを理解できなかったりして、悩むことも少なくなかった。しかし、ルームメイトの子が私の理解しやすい英語に言い換えて説明してくれたり、翻訳アプリを使ってサポートしてくれたりしたおかげで、少しずつ不安を乗り越えることができた。留学から約二ヶ月が経った頃、学校では約三週間の春休み(Spring Break)が始まった。この期間中は授業がなく、友人と遊びに出かけるか、家で過ごすかのどちらかであった。しかしその直前、ルームメイトが私用で急遽スイスに一時帰国することになった。いつもそばにいた存在がいなくなることに大きな不安を感じ、春休みをどう過ごせばよいか悩んだ。その出来事は、当時の私にとってとても辛い出来事であり、留学生活の中でひとつの転機となる出来事でもあった。

春休みの期間、私はほとんどの日を家の中で過ごしていた。友人グループのチャットでは遊びに行く予定が頻繁に話し合われていたが、実際に参加しても思うように会話に入れず、気を遣ってしまうことが多かった。ルームメイトも不在で頼れる人もおらず、「どうせ行っても楽しくないだろう」と感じるようになっていた。ホストマザーからは「せっかくの春休みだから、外に出てさまざまな経験をしてほしい」と声をかけられた。しかし私は、遊びに行ける友達がいないことを正直に打ち明けたこともあった。自分でも本当は外に出て英語に触れ、いろいろな人と交流しながら多くの経験を積みたいと思っていたが、会話が續かないもどかしさや自信のなさから、途中で諦めてしまうこともあった。ときには、ホストマザーに「友達と出かけてくる」と嘘をついて、1人で家の近くの海辺を散歩する日もあった。穏やかな波の音や夕日の美しさに癒やされながらも、心の中では「このままでいいのだろうか」という不安が常にあった。

そして、春休みが終わりに近づいたある日、私は思い切ってもう一度だけ友人グループの集まりに参加してみることにした。しかし、その日も思うようにはいかなかった。会話の輪にうまく入ることができず、どこか自分だけが浮いているような感覚があった。楽しもうと努めても心から笑えず、孤独を強く感じたまま時間だけが過ぎていった。こうして、春休みはあっという間に終わりを迎えた。ちょうどその頃、スイスに一時帰国していたルームメイトが戻ってきた。帰国したルームメイトに「春休みは何をしていたの？」と尋ねられたとき、私は「家でゆっくりしていた」と答えた。しかし、それには理由があることを伝え、春休み中に感じていたことを正直に話した。何度か友人グループの集まりに参加したものの、会話にうまく入ることができず、聞いているだけで終わってしまうことが多かったこと。本当はもっと話したいし、会話に加わりたと思っていたが、何を話せばいいのかわからず、間違えることへの恐怖もあったこと。そして、今まであまり話さなかった自分が急に積極的に話し始めたら、周りから変に思われるのではないかと感じていたこと—そのすべてを打ち明けた。それを聞いたルームメイトは、静かにうなずきながらこう言った。

「その気持ちはよく分かるよ。でもね、私たちはもっとあなたが話してくれることを望んでいるの。間違えても大丈夫。恥ずかしく思う必要なんてまったくないし、分からないことがあればいつでも聞いてほしい。今まで気づけなくてごめんね。」その言葉を聞いた瞬間、胸の奥が温かくなり、涙がこみ上げた。これまで抱えていた不安や孤独がずっと溶けていくような気がした。彼女の言葉を通して、「間違えてもいい」「もっと話していい」という自信を持つことができ、気持ちが驚くほど軽くなった。そして同時に、私は本当に心の優しい人に出会えたのだと強く感じた。

4. 結論

そこから私は、できる限り自分なりの表現を使って積極的に話しかけるよう努力した。すると、友達のほうからも話しかけてくれるようになり、冗談を言い合ったり、いつの間にか私の周りに自然と人が集まってくれるようになった。ある友達の誕生日パーティーでは、新しく出会った人たちとも会話が弾み、その時間がとても楽しく感じられた。自分の話を笑顔で聞いてくれることが嬉しくて、心から「話せてよかった」と思えたのを覚えている。この出来事を通して、人に相談することの大切さ、勇気を出して一歩踏み出すことの意味、そして人と心を通わせることの素晴らしさを学ぶことができたと感じている。この留学を通して、異なる価値観を柔軟に受け入れ、人とのつながりを自ら作り出すというライフスタイルを身につけることができた。言語や文化の壁を前にしても、行動に移すことの大切さを学び、それが新しい経験や人間関係につながると言う実感を得た。これからは留学で培ったコミュニケーション力や挑戦する姿勢を、将来の進路選択や国際的な活動にもつなげていきたい。

5. 終わりに

留学は決して楽しいことばかりではなかったが、出会いや挑戦を通してより自分を成長できたと思う。この経験は、これからの人生でどんな環境にいても自分らしく前向きに挑戦する力になるだろう。そして何より、今回の留学を通して得た成長は、私一人の力ではなく、送り出してくれた家族、応援してくれた友人、そしてカナダで出会った仲間や先生、ホストファミリーなど、多くの人々の支えのおかげだと感じている。関わってくれたすべての人に、心から「ありがとう」と伝えたい。